

C-54 布地による複曲面構成 (第1報) 人体腕付根周辺の複曲面といせ分量
文化女大家政 ○三吉満智子 土井真知子 是永礼子

目的 被服構成技術に布の特性を利用したいせという技法がある。これは縫目やひた等に頼らず、布地をいせることにより球面の一部のような複曲面を構成する技法である。そのいせ分量は、構成すべき複曲面の形状・人体の形態によって異なる。今回は人体腕付根周辺の複曲面形態を採取し、それを展南していせ分量を判定し、袖製作のための基本的資料としたいと考えた。

方法 被験者15名 計測方法①人体右胸部と上腕上部に計測基準線をいれる。②石膏包帯により型取りする。③型取りしたものを展南し、展南図上で各部の寸法を測定する。いせ分量は腕付根線と、それより肩縫目線上で25cm内方に入った位置を通る袖付線とで測定した。またこの測定値をもとにして、袖作図のための関係式を求めた。

測定部位	測定位置		腕付根線			袖付線				
	平均	標準偏差	胸囲の相関	Bとの相関	Fとの相関	平均	標準偏差	胸囲の相関	Bとの相関	Fとの相関
A 展南図袖山曲線長	40.2	3.0	0.76	0.97	0.51	45.1	3.2	0.81	0.96	0.45
B 腕付根囲	36.9	2.1	0.76		0.44	38.6	2.0	0.76	0.99	0.49
C いせ分(A-B)	3.4	1.1	0.61	0.73	0.54	6.4	1.4	0.76	0.75	0.33
D 展南図袖山の高さ	11.5	1.4	0.62	0.92	0.39	14.1	1.4	0.67	0.94	0.38
E 展南図袖幅	29.3	1.8	0.51	0.66	0.90					
F 上腕最大囲	28.1	1.5	0.40	0.44						
G E-F	1.2	0.8	0.38	0.65	0.09					

結果 展南図測定値、及び胸囲寸法・腕付根囲・上腕最大囲と各測定値との相関は左表の通りである。袖作図の際、袖幅には上腕最大囲を、袖山の高さには腕付根囲を基準とするのが妥当と推測され、いせ分量は肩幅の中に入る程多くなる。